

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2008 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	英米文学研究科	専攻
指導教員	所属・職名		氏名
	立教大学英米文学専修課程 教授		藤巻 明 印
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	移動という観点から見た Wordsworth の空間表象 : 「歩く」描写をめぐって		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期課程 2 年		高井 美紀子 印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
研究期間	2008 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

2008 年度は、Wordsworth 研究の土台固めとして、*The Prelude* の全 13 巻の精読に着手した。それと平行して、*The Prelude* 研究の成果を 2008 年度立教英米文学会で発表をすること目標に研究を進めた。前者に関しては、現在、指導教授の指導のもと、*The Prelude* の全 13 巻のうち、3 巻の一部と 5 巻を除いて、一通り目を通し、日本語訳を終えた。後者に関しては、2008 年 12 月 6 日に開催された 2008 年度立教英米文学会において、『自由と啓示：ワーズワス『序曲』における「歩き」のフィクション的機能』と題して発表を行った。この発表において、Wordsworth 詩学において、「歩き」の表象が独特の象徴的地位を与えられていることを確認し、それを近代的な自由の観念と結びつけて考察し、私の Wordsworth 研究における新しい地平の開拓に着手する足がかりを築くことができた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[徒歩] [身体] [自由]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、Wordsworth の自伝的長編詩 *The Prelude* の本格的な研究に着手した。長大でテーマも多岐にわたる *The Prelude* という作品を私なりに論じてゆく切り口として、私はこの作品における「歩行」の描写に着目した。*The Prelude* の Book 1 の冒頭における、グラスミアへ向かう Wordsworth の徒歩旅行を始め、この作品には、Wordsworth が歩いている場面が実に多く登場する。それだけではなく、Wordsworth の中短編詩においては、登場人物の歩く姿がしばしば入念に描写されている。

上記のような点に着目し、まず私は、6月14日の第2回英米文学研究方法論 II の授業において、『Wordsworth の初期の詩における放浪者：「歩く」描写をめぐって』と題して研究発表を行った。この発表で、私は *Lyrical Ballads* に収められた Wordsworth の初期の中短編詩の中に描かれている放浪者の描写、特に‘Old Man Travelling’と‘The Old Cumberland Beggar’という、放浪する老人を描いた2編の詩に描かれている放浪する老人の描写を検討した。Wordsworth の詩における放浪者の表象は、近年、研究者によってしばしば論じられており、特にリベラリズムの観点から論じられることが多い。Wordsworth における放浪者の中に体制を揺るがすアナキズムの可能性や、ホップズの言う「消極的自由」の可能性を見出そうとするこれらの研究は、興味深く有益な視点を私に与えてくれるものである。しかし、放浪者個人のレベルで考えた場合、そのような放浪にどのような意味があるのか気にかかった。‘The Old Cumberland Beggar’において Wordsworth が擁護するのは、物乞いの老人が戸外を自由に歩き回る権利であり、彼が近隣の住民から自由に施しを受ける権利である。一方で、彼が糾弾するのは、そのような浮浪者を取り締まり、救貧館に隔離し幽閉しようとする当時の救貧制度であり、彼が、この詩において、救貧館に閉じ込められた老人を“captive”「囚人」と呼んでいるのは注目に値する。なぜなら、彼は、*The Prelude* の Book 1 の冒頭における徒歩旅行の場面でも、グラスミアの新しい家に向かって歩いている自分のことを、“A captive (...) coming from a house / Of bondage” (6-7)「都会の虜囚の家を逃れてきた囚人」と呼んでいるからである。歩くという行為は、Wordsworth の詩において、拘束された状態に対して、その身体的なイメージを通して自由という抽象概念を象徴的に表現しているのである。‘The Old Cumberland Beggar’においては、登場人物である浮浪者の老人が、自分の身体以外は一切財産を持たない虐げられた弱者であることで、自己の決定権が行使される唯一の場としての老人の身体性を強調させており、その執拗な身体描写は、「歩く」という行為が人間の身体、特に身体の自己決定性と密接に結びついた行為であること示しているのである。しかし、人間の自由と「歩き」との関係の問題に関しては、自己を喪失したような、自由な意思を欠いた放浪者たちの歩きが、果たして真の自由と結びつきうるのかという厳しい指摘も寄せられ、それに関しては、今後の研究の重要な課題となった。

この発表の後、Wordsworth における「歩き」のイメージが、身体性と密接に結びついたものであるという、上記の発表で得た結果をもとに、12月の立教英米文学会での研究発表に向けて、*The Prelude* における「歩き」の表象の研究をスタートさせた。この研究は、*The Prelude* の精読兼日本語訳と同時に進められた。まず、研究を進めやすくするために、私は *The Prelude* における Wordsworth の「歩き」の描写を、「水平の歩行」と「垂直の歩行」という大まかな2つのカテゴリーに分けた。「水平の歩行」には、Book 1 の冒頭の徒歩旅行を始め、作中の至る所で描かれている、平らな大地における Wordsworth の「歩き」、主に“wandering”という語で表される、自由な気まま歩行が含まれる。「垂直の歩行」とは、Book 6 に描かれているアルプスのシンプロン峠越えの場面と、Book 13 に描かれているスノウドン登山の、2つの有名な登山場面における「歩き」の描写を指す。私は、*The Prelude* において、身体的負荷、すなわち重力の負荷が伴わない「水平の歩行」の描写が、自由のイメージを伴って描かれているのに対し、重力の負荷を伴う「垂直の歩行」には自由のイメージが伴わないという仮説を立てて研究を進めようと考えたが、便宜上強引に「水平歩行」、「垂直歩行」というカテゴリー分類を行うことの有効性に疑問が生じ、そのような分類をやめた。しかし、その際に得た、登山の歩きに伴う重力の負荷という観点は、この後研究を進めていく上で非常に有益なものとなった。そして、Wordsworth によって自由のイメージを与えられた「歩行」描写のフィクション性と身体性との関係に焦点を当てて研究を進めてゆき、

研究成果の概要 つづき

12月6日の2008年度立教英米文学会において、『自由と啓示：ワーズワス『序曲』における「歩き」のフィクション的機能』と題してその成果を発表した。

この発表で、私は、最初に、Wordsworth の詩においては、ロマン派詩人の中でも際立ったその物質的、即物的表現が様々に論じてこられたこと、またその多くが彼の詩における物質性を否定的に捉えていること、しかしジリアン・ピアラを始めとする近年の研究では Wordsworth の物質的表現が再評価されるようになってきているということを論じた。ピアラは、Wordsworth の詩において、「動き」という感覚的体験とそれを受け止める身体器官という即物的描写が、詩人の想像力と絡み合っ詩の世界を形成してゆく様を論じており、彼の詩における物質的表現の重要性を訴えている。そのような背景を確認した上で、次に、Wordsworth の「歩き」の描写における物質的描写の分析を行った。まず、私は、‘The Old Cumberland Beggar’における老人の歩く様子を描写する際の際立った物質的、身体的表現と、*The Prelude*における Wordsworth 自身の「歩き」の描写を比較検討した。Wordsworth 自身の「歩き」は、‘The Old Cumberland Beggar’における老人の「歩き」の描写ほど明白な身体的表現を伴ってはならず、むしろ自由という抽象的概念を「歩き」という行為で表現しようというフィクション的な意図の方が目立つものである。しかし、*The Prelude* の Book 7 において、Wordsworth が、ケンブリッジを卒業した後、“a little space of intermediate time” (*The Prelude* 7. 65) 「しばらくの猶予の時間」を求めてロンドンに滞在する自分自身を“vagrant” 「放浪者」と呼んでいることは、彼が放浪者の中に何らかの自由の表現を見ていることを示すものであり、その意味で、彼の詩における放浪者の姿は、自由を求める彼自身の姿が投影されたものだと考えることができるのである。最後に私は、「歩き」による自由の追求に根源的に伴う限界や矛盾を Wordsworth がどのように描いているかを論じた。Book 6 のシンプロン峠越えと、Book 13 のスノウドン登山における「歩き」の描写は、自由のイメージを伴わない点で、*The Prelude* に描かれている「歩き」の描写の中で異質なものである。これらの「歩き」に自由のイメージが伴わない理由は、そもそもこれらの「歩き」が、重力の負荷がかかり、道も限られた登山であるからで、当然そのような場合には地上においてのように自由に歩き回ることにはできない。ここで重要なのは、このような登山の「歩き」において、Wordsworth は自由を失う代わりに、啓示によって超越的な世界を垣間見ているということである。Wordsworth において、人間の身体が重力に逆らおうとする登山における「歩き」が超越的な啓示の瞬間をもたらすことを考えたとき、Wordsworth 的啓示の瞬間とは、結局は地上の重力の支配下にある人間の身体性というもの強く浮かび上がらせる。私は、人間が身体的存在、地上的存在であることを認めた上で追求されるワーズワス的自由とは、最終的には地上的な自由であり、それは永遠の相を垣間見せる啓示の瞬間との対比によって、より強く我々の眼前に提示されているという結論を持ってこの発表を締めくくった。

この研究は、「Wordsworth 詩学における反超越性を土台とした超越性の探求」という、私のこれまでの研究を、Wordsworth における「歩き」の表象や移動性といった、今後の研究と結びつけるものとなり、これからの研究の足がかりとしては、まずまずの成果を上げられたと考えている。しかし、超越性と反超越性（身体性）の問題に関しては、その土台となったハートマンらディコンストラクション批評の成果の域を出ておらず、先行研究をどのように乗り越えてゆくかが今後の課題として残された。今後は、馬車や船といった当時の様々な移動主題やインフラの整備などといった、社会的な視点も取り入れて、Wordsworth における「歩き」の表象や移動性の問題を多角的に検討していきたいと考えている。なお、2009年5月に開催される日本英文学会第81回全国大会において、『自由とモラトリアム：ワーズワスにおける「歩き」のフィクション性』という題目で研究発表を行うことになっており、これまでの研究を土台に目下準備を進めているところである。